
役割演技も楽じゃない！

はるな みちる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

役割演技も楽じゃない！

【Nコード】

N8524G

【作者名】

はるな みちる

【あらすじ】

ロールプレイヤー
役割演技者として生きることになった少年の成長記録。

1 誕生（前書き）

俗に勘違い系と呼ばれるジャンルを目指しています。好みに合わない方はお氣をつけ下さい。

1 誕生

役割演技という言葉聞いたことはあるだろうか？

ああ、ロールプレイと言い換えた方が聞きなじみがあるかもしれない。

生い立ちや姿形、あるいは人格まで、あらゆる条件を一方的に与えられて、それに即した行動をとることなんだそうだ。

この世界には、そんな役割演技者ロールプレイヤーが数多く暮らしている。そして俺も、その一人だ。

まず初めに、自己紹介をしよう。実を言うと、まだ生まれてないから自分の設定も知らないんだよな。

生まれる瞬間に天の声みたいなのがふあーと降ってきて拒否権なし。なぜかこれが世界の常識らしい。

俺はラフケ。ファミリーネームは無い。つまり、下賤の生まれってヤツ。

年齢は…あれま。13歳だってさ。ガキじゃん。

性格は劣等感、不屈の精神、冷静、冷酷、無口。

目標は反乱達成。

っておい！！ マズい。これはマズい。どっからどーみても悪役じゃん！？

しかも明らかに暗そうな性格だし！

しかもこれ、反乱達成って所属国家がまたグロース帝国だってよ。

世界一大きな大陸の統一国家で、なおかつ平和主義の賢帝が治めるすんばらしい土地さ！

ムリだよ。すぐしんじやうよ。っていうか何が不満で反乱起こすわけ！？

まあ、不満なんて言うだけ無駄なのは分かってたさ。結局、俺は設定通り13歳でグロース帝国に生を受けた。寿命がくる80歳までに何とかして目標を達成するべく訓練を始めることにした。さて、これからどうやって生きるべきか。

もう一度自分の設定を長所と短所に分けて考えてみることにする。

まず長所。

とりあえず、冷静はいいな。こうしてまず考えることから始められるのはこの性格のおかげだ。今後冷静さが武器になる局面は多いだろう。

次に不屈の精神。うん、転んでもしくじっても挫けないのは良いことだ。

それから…。あっ！ラッキー。俺って美形な設定らしいぜ。これは意外な所で役に立つ設定かも。でも、こんなもんか。

次に短所。

劣等感、冷酷。

一つ一つなら問題ないけど、二つとも揃っているのが頂けない。これじゃあ初めから国に仕官して好機を伺いたくても貴族ばかりの仲良し軍学校になんかとてもじゃないが馴染めないだろう。

その上無口。

煽動者として反乱を喚起するのも難しい。

…絶望している場合じゃないな。

とりあえずの方針としては、まだガキだっていう将来性と不屈の精

神に期待を託して、戦士としての腕を磨いてみよう。

長かった考え事はこれで終わりだ。それからはず2年間、剣術にも知識にも目を向けず、ひたすら体力の向上に努めた。

毎日、腕が上がらなくなるまで薪を割る生活。面白みの欠片もないが、当面の生活費にはギリギリ足りたし、体力の向上にはうってつけだった。

そんなある日。やっと運が向いてきたのか、それからの人生を左右した、二つの出会いが訪れたんだ。

ステータス

体力：350	(+248)
知力：15	(+0)
剣術：3	(+0)
体術：3	(+0)
人望：0	(+0)

2 一人目との出会い

「なあ少年。何でおまえ、毎日毎日こんな大雨の日まで薪割りなんてやってやる？」

そんな声がかけられたのは、いつも通りに薪割りをして、そろそろ寢床へ帰ろうかという時間だった。

内心では飛び上がるほどびっくりしつつも、ゆっくりと後ろを振り返ると、そこには一人の男がこちらを見据えて佇んでいた。

「雨だからって休んだら、食うものが買えない」

質問の意図が全く見えないが、律儀に答えるのは相手に逆らう理由がないからだ。

「ガキは親が食わせるもんだろう。親はどうした。死んだのか？」

役割演技者には親はいません。そもそも俺、生まれた時もう13歳だったし。

つい余計な事を考えて返事をしそびれた俺を見てどう思ったのか、男はバツの悪そうな顔をして頭を掻いた。

「ちつ。お前もかよ。最近多いんだよな、親ってナンデスかって顔する奴」

「それは、おかしなことなのか？」

その言葉を聞いて思わず訊ねる。

この世界には役割演技者が俺以外にも数多くいる筈だ。彼らの唯一と言っても良い共通点は、産んだ親がいない、という事。

当然、役割演技者ではない人々もその事に疑問を持つ事は無いと思いきこんでいたのだが…。

「親の顔を知らないって事ならおかしくはねえんだけどな。初めから親が存在しないなんてあるわけねえだろ」

なるほど。一つ、隠すべき事を学んだよ。本来なら感謝の言葉の一つも伝えるべきなんだろうが、この時俺はどうしてもそんな気分になれなかった。

自分でも気づかないうちに体が強張っていく。

この男は決して悪人ではないのだろう、とは思う。根拠の無いカンだ。

でも何でだか、こいつ、嫌いだ。もしかしてこれは、

「なあ、兄さん。あんた、身分とか、地位とか、高い人、か？」

劣等感を感じてるんじゃないだろうか。

「あ？あー、まあ。一応な」

…大当たりだ。

何でだよ！直感的に良いヤツっぽいと思ってるのに！

出来るものならここで顔見知りになっておいて後々の布石を作っておきたいさ！

それでも俺は、そうすることが出来なかった。

自分の野心や自信が、劣等感に追いつかないからのようだ。

「何で俺になんか声をかけてきたのかは分からないけど、仕事以外の話をしたのは兄さんが初めてなんだ。そのことはすごく嬉しかった」

何故かムカムカとする気分を何とか抑えつけて、必死に言葉にする俺へ、男は輝くばかりの笑顔を向けてきた。

「そうなのか？なら思い切って声をかけてみたのは正解だったな。毎月辺境警備に来ると絶対に一人で薪を割ってるからこれ一年ずっと気になって…」

「だけど！俺、ダメなんだ。貴族とか、将校とか。理由もなく体が震えるくらいに」

主にイライラ感で。

「…そうか」

叫ぶように告げた俺に、それでも彼は微笑んだ。

「強くなる道はいくらでもある。今日一日ずっと見てたが、お前全く休まずに薪割ってたろ。そんだけ体力があれば後は腕を磨けばいい。まあ頑張れや」

何で鍛えるために薪を割ってるのがバレルんだ。

「お前が幸福になれることを祈ってるよ。じゃあな」

くっそ！なんかめちゃくちゃカッコいいじゃねえかよ！名前知らねーけど。俺だったら話を遮ってケンカ売ってくるガキに微笑むとかムリ。絶対ムリ。ソナヒトニ、ワタシハナリタイ！じゃなかった。グロース皇帝も人格者だって噂だけど蹴落として反乱を達成しないといけないんだよな。

なんだか心が寒い。本当にこの人生はツライことばかりだ。

悲しみを上塗りするかのような大雨に打たれながら、俺は今度こそ寢床へ帰るために歩を進めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8524g/>

役割演技も楽じゃない！

2010年12月11日00時06分発行